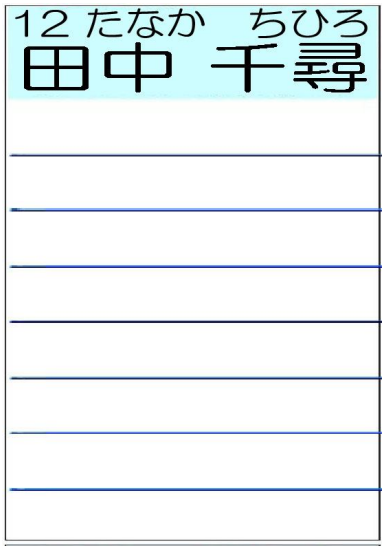
「日々の理科」（第 1173 号） 2017（H29),-9,22

「てつがく対話の振り返りカード」

お茶の水女子大学附属小学校　田中　千尋

（1）「てつがく対話」の振り返りカード

新教科「てつがく」の入門期である３年生では、対話後の記録として、簡単な記録カードを試行している。



このようなカードで、大きさは付箋紙程度の大きさである。児童氏名があらかじめ印刷されている。最初は罫線なしのものを使っていたが、「罫線があったほうが使いやすい」という子どもたちの意見に現在はこの形を試している。

実際に使わせてみると、罫線なしの時は数行しか書けなかった子どもが、ずいぶん考えて、一定量の振り返り文を書くようになった。

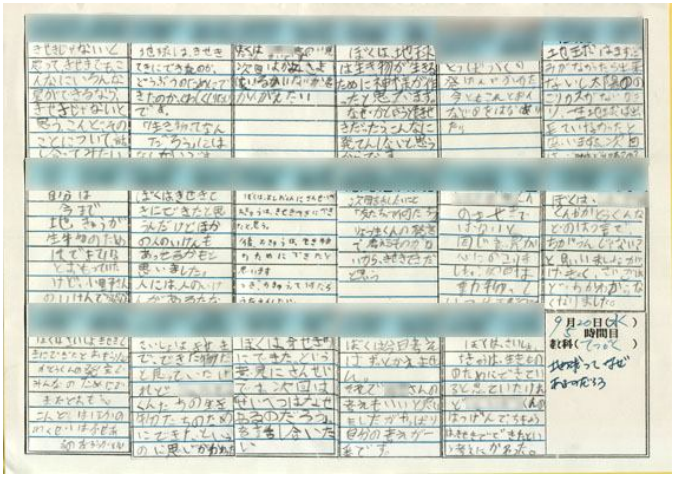
（2）振り返りカードを台紙に貼る

振り返りカードは、てつがく対話のあとの、授業の最後の５分程度で記入する。量的にも時間的にも、３年生の子どもにとって無理がなく、持続可能な自己評価方法の一つと考えている。

子どもたちが描いた個々のカードは、同じ大きさの無地のカードを並べて印刷した台紙に貼ってゆく。大紙には、あらかじめ「テープのり」（下写真）をつけてあるので、あっと言う間に、全員の振り返りカードの一覧が完成する。

（3）台紙に貼ったカードの活用

台紙は男児、女児それぞれＡ３サイズである。写真のように一覧性に優れ、いろいろな活用方法がある。



①印刷して、子どもたち全員に配布する。

最初はこの方法をとっていたのだが、１学期に「配らないでほしい」という意見が多く、一旦やめている。しかし、互いの考えを知る上では有効なので、再開予定だ。

②教師が子どもの思考を知る手段の一つとする。

つまり「評価」の一つである。個々の子どもの考えやその変化、学級全体の思考の傾向などがわかる。ノート一冊ずつを点検するのは時間がかかり、毎回の「てつがく対話」の分析は難しい。しかし、この方法なら教師側から見ても、持続可能な方法と言える。

③次の対話の「問い」を見出す。

新教科「てつがく」の学びで大切なことの一つに「連続する問い」というものがある。この振り返りカードの一覧は、次のてつがく対話の「問い」を見出す上で、非常に有効な方法だと思う。

カードを提出してしまうと、自分のノートに記録が残らないという問題がある。これは、カーボン紙とボールペンを使うことで、解決することができる。